



元正間記
五

~ 13
2696
5



18
2696
5

元正間記卷之十三

大目録

一 大強動之事

一 生教殺生禁制之事

一 荒柳江及秋食少將之事



一 大坂の事
一 大坂の事

一 大坂の事

目録

一 大坂の事



元正回記卷之十三

大坂勤王事

去程年大坂切の掟出と中野の小屋へ主
柄より大坂を召寄せとて中野の小屋へ主
傳八中坊長老徳川奉公の御目付主分徒
目付御小目付主の役人作を以て兼と
江戸の町々を改めしとて大坂其終迄是等
こと柄より大坂を捕へと中野へきて御天下
の御威光より一橋の本の御節ももて木下で
二天入の御をもりて一旗物を打て内より

厚綿の布志をとりて大を入て小人目白
長流人多し荷もせ幾千石足の犬と毎日
中世へよきい新道は助の役人先
よこや大の白の中通りぢやかきと
先掛もちんは往來の者もれをちう道
しける大名の中通りや行列は奇きを
完く中通り本りもとやましくし屋を
入るも朝夕焚出し上白米の飯と糀
おとる流と喰せ居る客のりてふし
矣ちうに萩原近江ちや佐ねもりの

車及天下の其具を考関八州の代官所
下知しるるよ有一石の積をゆひ
大扶持をたえ江戸町中を丁あ
玄米五斗六斗の割をいふたより志に
公儀のいせお遠らお後といは中世の役人
私欲う出来大よい名もいふかの
往用よまゝえ米人官の喰車の余り糀の
揚骨五斗を喰いおのり候りあき
大は飯上白米の飯と糀を思ふ候
りしし走る車しう暇もたぬお入る

少佐より斗麻と居り及び名を好い出る
死をとも大多く一甲情の罷過とともおれを
之に一板亦と居り大い其こ一を世面
より多きと隨分大切と細き若く喰らひ
其れを好む時と事り亦く早業と訴へ
出つとむの作後を以て大之を志
迷意出来と女大の懐胎とすと訴ひ或
か之令一府身とを披露もれを別格使
を下し一懐胎の大を以味首尾能
たをとも一却とあり訴へ出たりと

中後一又怪我とあり大府の役加府突
府を改め第一切府突府とあり大に
甲処をとり大に甲と及に一町内
預けらるる甚せんむいゆき事と語
子絶し利又病大府身とあり醫と上
其に概町三丁目と著とついで後世
と一主婦と一の笑を傳物と云者
情家の大の好いと云と云と云い
早業其大は事と云と云其後
少佐役人の身より入其と居り大の好い

一を四々傳助くまうに〜いつまじ平
愈仕りぬら役人申のト主に〜ヤ大医者
と名付ぬら大い病大い彼の傳助より如
付其田〜方逆を其越始めの程い其を
傳助ぬら後〜如ら其龍よ糸入り六枚
〜と名し志〜ぬ一層織のき相織を忌〜
至既中〜〜未〜け医者者病を及ぬ病
大〜〜大〜を忌〜脈と考ぬら心
を起〜て薬を〜〜せん〜松は〜の
〜〜と〜書〜〜〜〜後〜〜い〜

の粉斗一味ち〜と〜〜知〜役人傳助
し同穴の掘〜〜〜〜怪〜〜病〜又と
産の御取扱ぬら〜〜〜大子〜を
死た〜ら〜ぬら一町内登取のヤ匂〜影〜
お入を及〜〜の事〜役人〜袖のト
傳助〜掬ぬら〜〜〜合銀を〜ら〜女
〜〜い〜儀〜〜一洒〜碎〜た〜
病を〜〜事〜〜ら〜一町内大騒動
と〜夫の〜〜〜〜〜病を負
い〜〜い〜殺〜〜〜者〜〜〜日

玉中々、うぐれ磔よ成獄つゝをさるる大故
死罪よ紅きく者何正人もさるる大故
去り次諸大名口譙えの面くした因行の事
故や大奉行は人の泉流も世の中より
末世の今よりむる迄大 ざり様とやうい
ひ及之具に江戸より 軽口吐くをば
賣り途中より大い吼をきかともい
は之何のそば切をさむけくちら
これをはちまぬきのそば大をさるる
とさ食るるくく彼そば賣るる

下りく七地より畧り梳を拵合ませぬを
石より下りくませといひ、又か所刻下
水辺分おたし、江戸へくせきよむる夜
表の方より己の家より帰る途日本橋の朝
市より生鱈を本買手よりけり両は
き来り新より大い心付く鱈をさる
故たぐいとといひ在大切のや大様故せい
ちりそはりさるる潤をさるる去るにて
も取と得る身の油を志すりま
潤いさるる音をむる、大いさるる

車せふふをむうーか中付いさ大骨
折るる骨よこしくとてそまけいの午
末世たんと世存骨折る大骨取らる
とりりて帰るけり也ー江戶中経義
まがよふといふ天下の政さるー
としよ者好ー其に江戶として除説を云
出ーりらいかんとせんとする物と何方
よての事下りくと尋ねられたと櫻町猿若
あまの石を見物せー市川市十郎
うまーるる紫を口よていーまいと

之海一影よて諸人笑いを催ーりけり
志うるを江戶中流布ーるのまの
さ事いそるうーとさ好いうをやる
早も南天の実とむめかーをせんー吞め
い其好いを信をもさしむれらるるり
好いこるーと危と江戶中押並南天の
実と梅子とせんー吞り先り公儀は
ヤせんものありする物と仰り函ー
其に吐の上は麻の衣たりとさ若彼う
せー麻の衣筆とさ函ーいなり

海を渡る八丈鳥へ馬を渡されりて是より
將軍家にお葉山や系法のおりけへ馬を
番をとり居りや機嫌を損へたる通に何れ
江戸中のかゝるをて丸く此へををりて是に
大のてい法入連志天思いにくくかゝる
車成しは護持院僧正出仕て御り馬を
御らまや報りてあてしきりかゝるゆゑ
遠路に御舟を大急ぎのや政道に誠
生類を不喰生茶を不踏と誓くこの道
りてゆれと生るを随分や助ケる遊ば

了り実のや仁政にて時更君のや生れ年成
のや事よきや一代八幡菩薩やち神年を
八幡よき放生舎を奠をやまはし放生
舎を林へてかや神事急ぎ茶物の根
元とや神院ゆれと生れや憐れ無
茶と御出り老中始めてや役人より分
就申まむや觸りて朝夕の悟教ふ
も生るる実煮い喰りてれ鳥類の料理
も無用よき別れ江戸中を教ふと心
細るるや貴や法をたより勿帰るの料

理かゝりていりきりお宵者め是と曲事に
伴身らるむのく作由依るや大名をいさ
生らる実多入車や法交よと恰あとい老
いり生らる入色も去間せりを名
と誦子と称しける事と成ぬや家門方
ア役人方其外町し迄のや停止よらあり
志りし多教らや法交り生らるの幸い江戸
町中其外ハア捕い多き志りれ
お軍家や鷹をい政や鷹せや止ら遊い上
日本一流法大名を鷹せをお止ら後世の

者大にお習しん教生せり鳥教し能らる
いりや手出しとる老ちりれと大いの下る
先しり多い魁すめし是えを行くも
是と八代例河岸のや堀よ浮る鴨わり
たも風情之誠天下のや威光江戸中押ぬ
いり鳥教を料理しめいり大名尻老
いりや在所方多をいりあらし志り
料理人相をいりしと水を入其中へ
ぬを志りめ一枚しゆらぬ松よして穴を
堀り埋めしと志りぬ其に四書一

中宮御本より伴後九昂後連三正七十八取の
長没より長五川堂を清と云者の侍堂を良
十二才より成りし吹矢を以手鞠多しつ
杯的なるを一抱いりし境の坪のまき木に
泊りしはともめを見し何れらんねく吹矢
を吹りけり此矢つともめの羽よりるりて燕
隣を浦の中目舟を田をたなり成居留の邊
落りし月並の神文よりお勅らる
中目舟後を目立てしはともめを丸上に見し
りりり色い昂せり死したの吹矢を足に

子紙よりしをりり利をを無き見れを
長五川堂を清後何果と信りえり
長田反隣の塚を三石を流るを見届白流
隣をりしものも後故長五川をり
存ししを店ら上をを急を車たれ大和の
中目舟後毎月の神文のちをさしを母是飛
ら儀しつ披衣より及まら冷茶と成り
坐右昂召捕さし法度破の科となりて
江戸中を引渡りし川路り表り於り
折首より行りし十二文ふりし

東西のよきまゝしねり子供さへ中決三輪
く死罪の御り具物の人、田を流さぬ等
さへ一壺ち郎親と天下の中政道味略
こく一報生の道具侍よりつけ金も不
石のふり一方とくこ宅崎へ流さこ主人
伴後九郎後いこ今年関つて作分たり
ま右に戸中の者た身の毛もくけて中法
一皮を守りし大を大切するもは後、初め
上、煮る、廣大、年、成、上下、万、氏、の、難、義、(半)
煮のうへ、又、生、煮、の、中、憐、に、使、る、煮、の、物

人命をたぬる者、一、苗、の、初、軍、中、政、を、飯
初りてし一度は作し、二、愛、の、初、り、中、仕、並
之、元、来、大、骨、中、大、骨、に、く、中、四、代、の、う、ち、中、建、立
と、き、く、神、社、佛、閣、を、中、建、立、を、り、し、と、老、り、て
中、心、に、叶、し、中、軍、を、高、祿、に、中、取、立、教、十、人、に
奥、方、女、中、表、向、の、中、小、性、底、に、中、庶、を、考、え、下
さ、し、お、飲、物、の、限、り、を、中、車、及、江、戸、の、振、右
中、前、代、の、一、倍、せ、り、江、戸、中、を、中、り、及、と、氏
中、法、に、よ、り、し、を、中、車、下、車、大、り、科、者、福、く
柳、沢、出、羽、と、皮、日、増、り、中、出、派、り、て、元、祿

七年又武州川越の城より兵作舟十万石
を賜り毎日の登城 將軍ヲお伴ふ
終日お誂退出の刻限取四つ時及い
りし此部ヲ急ぎ應じ 將軍のテ前自
由に居りし人下を以て諸大名公族に
を以て教ふこと之語に後いしり新成を
柳沢成へ入るに申候様にお付しと立身
出世願事、うねり候と之事取く依り
為平大小名を進物を送る日々の様様
を伺い申前より系物絶ち事取し

甲用向あを取入るに申城の取入るに退出
の事取諸大名役人方又と大名の使者ホ
を取取四九ツをとお侍是より申候柳沢成
表申の、未明の取九つを以て宛て、冥冥万焼
のこころに誰人かより候侍の発より申食を
指上ふと申候とんりそばり申候取合良
を進物より取らる大名を以て出候成甚
きりこころに去申を深切の送りぬること
翌日申城よりおしり申候を申候と申候
傳へ候りし諸大名申候の事と我りし

中夜食を進中一と云いし中夜食を御
進物と云ふ物あり去大名流毎夜諸家
中夜食を御指上多分ある中夜食の可
年之大将より中夜無の年より官杜者
中夜食を代金にも指上中夜何来
中好この物ある上中夜何来代金
目錄より進上は柳沢夜食を御進
中夜食の御指上は成りし事ありし
し諸大名の御進上は實り能くし
柳沢夜食の御進上はしし事ありし

まいたる事ありし代金よりまいたる事ありし
事之と云ふ是れ毎日一諸大名中夜食代
金を御指上しし事ありし是れよりし
中夜食を御指上しし事ありし是れよりし
寺社奉行の本多伯耆守元来八千石成
り家老本多小守と云ふ者毎日一柳沢
中夜食を御指上しし事ありし是れよりし
中夜食を御指上しし事ありし是れよりし
中夜食を御指上しし事ありし是れよりし
中夜食を御指上しし事ありし是れよりし

角より何者か此年を終る事
神田橋の座をとり伯耆
本多ともし平高を以て
元正間記卷之十三

元正間記卷之十四

酒目録

一 酒井勲負佐勇氣之事
并 柳澤屋鋪出火之支

一 世森三郎秋山十良之訥喧詭之
發端

何者か此年を徳治二年
神田橋の御座りたる伯耆
發給すべしと云ふ事
一 母女三時味七十八歳前河内
并休罷至難出火之災
一 所并障食式言席之事

白紙

元正間記卷之十四

元正間記卷之十四

酒井敏貞佐後常事之事
若柳沃及屋鋪出火之災
大名元多事申年し佐作左京左衛門尉柳沃
占中入事知十八万七千石成し
新田を言ふ事と云ふ事拾万五千石
作年秋田少将と云ふ任之縁十二年也
是以秋食の取持たりと云ふ事の上
大名と云ふ事と云ふ事其命け頼り事
以後聲出世何事七天下の政道一人の

柳氏及をさるぬ者。社明のりりり柳氏に
柳氏及漸く十年と来の大名扱より重
代の寶物と云者不持たり。其は言家後
の吉良上地所及のこく茶の湯好年て
志年の人より法大名に知人あはく
誰人及す何と云重寶多と云事より
志年より及年出羽と後吉良及年人
より同よりふもより志年より言ひ
けり別吉良及をけりいあり其許
中家平の定家渾の筆紙と云と兼る

お見中夜間志より借下たりと兼人
さゆきたより用し兼より柳氏及
の事形と早速使者を以送りは中
借借用とい全備りに借取より兼る思
案之畏て速重代の重寶を送りし
是れより及ハ次進上年とも是は
きりり諸家の重寶をおひりり
借取より及より細川越中及の中家の
重寶猿列の屏風と云を進物より及
よりと云是別小浜の城之酒井頼貞依及

伊家より雲龍の茶入を右の茶入ハ
大猷院様分下より送らるる無比の茶入
一々日本より送らるる妙法に及ぶ先年ハ茶
入持し者なき系極丹後ち後隠居一系
両少く買取らるる酒井は十八万石ハ
大名之無き柳沢及彼雲龍の茶入
よんがく吉良成を以借用す交む中
送りし教員依成を以柳沢に故使者
を以送りし柳沢ハ日教を以送りし
是も依り教員成より一覽を来し

茶入は返り可なり旨三度と使者を以
俵儀より知れり送り進可なりハ
或いし今四五日借可なりと返りし
教員依成其に之流を才一と送りし
後人より外ハ大名のより柳沢及福
無く人取腹に居る無夜り入る柳沢
ハ極方退出の御自身出相成り茶
教員依成中より先達系入ハ覺
成交むハ御用立ハ知教日
留置送りし三度と使者を以

可進可退の事進ははた今より退は
多し友禄重き人なれば成事なす
べし去るべきも執負依自身より
取取可
系川よりいとお酒可退ことお述
出洞成
近著お侍白眼身より扱へり出
相成
さう多子好き風情よりい
毎日の
出仕わす入る斗退出彼先と
子透
と年故志いり一覽し
依之
延引るや自身や出進に迷
悉仕
明日は
是る持以てと
言らるる
執負成

重しいやし明日をい
不お侍ケ松子
上と危し用拙者ら
可立と
古
併
と
茶入を自持
出執負成
後
後
さ
き
り
れ
と
昂坐より
立
と
帰
ら
き
ら
も
其
に
柳
成
後
と
指
を
突
つ
ら
大
名
の
井
伊
掃
部
成
松
平
越
中
成
戸
田
采
女
成
山
酒
井
執
負
依
此
四
人
成
り
て
と
多
し
と
少
治
セ
り
執
負
依
年
に
横
町
の
至
美
の
祖
父
瀆
成
ち
大
老
の
成
大
猷
院
様
の
杖
の
先
より
下

寛延九年江戸大火事ヲ城ヲ燒く事
將軍此を憂へて之退教日ヲ留まら
んといふの内一郭を構中九と名付今之を
瀆改ち然いして先祖の菩提所を立
ち善寺と云ふ禪林を九と号し車馬
城郭分ふより一區賣の内年古をいし是
斗ノ寺を建らるるに未代をけんし
地を他の大名より後に申すに
出羽守及家康公の言題よりして
將軍にお礼りしと云ふ上之を依るたのを浦

三多一切と云ふ今柳沢刑部少輔の屋敷
成刑部と出羽守の次男に其後元禄十
六年十一月廿日の江戸大地震ノ所
見有る所是武と大破り及よ依りて大名
白中晉清の傳は作付各々見有るを
不宛兼と申す酒井親貞依りて斗四谷牛
込市首三ヶ所の中作付物に内福
の大名と云ふ別寺の人と云ふ事
也に他の見有る事と云ふ傳お初ら
るる是れ雲龍の茶入と云ふ事

十五組火消の西へ退く。一走り去る。然れ
凍大火とお成り本丸の火の手移り白昼に
一。お軍家おとろきあはれ。子来り矢
倉平上り。嬉し上。覚る。一。お出羽也
屋。一。おとろきあはれ。お例。元。近。後。侍。申。也
を。お出羽也。上。使。ら。下。並。出。羽。也。屋。浦。出
火の由。おとろきあはれ。お妻子。同道。仕。り。月。来
り。本。丸。を。退。く。松。上。三。急。し。出。羽。也。い。妻
子。諸。君。松。本。太。系。を。支。度。へ。お退。き。處
上。急。よ。り。おとろきあはれ。お例。其。方。子。供。元

并。お例。ケ。お小。悦。も。次。を。成。ち。後。以。後。前。也
前。田。出。重。ち。お石。連。お例。お用人。松。本。伊。賀。也
志。田。豊。之。前。也。内。后。山。城。也。同。道。り。て。登。城
也。お軍。家。よ。り。お出。羽。也。不。急。し。出。火。と。之。を
何。れ。怪。神。し。おとろきあはれ。お例。の。後。お満。悦。り。おと
候。上。急。の。名。也。お海。法。り。大。子。前。り。て。火。事
を。おとろきあはれ。上。使。を。り。おとろきあはれ。お本。丸。へ。お退。き。處
車。お出。羽。威。勢。の。おとろきあはれ。お一。期。も
将。軍。お志。申。阿。部。豊。後。也。お小。笠。原。佑。後。也
お例。お用人。松。本。太。系。を。支。度。同。年。お見。也。火

消の面をを各界仕子し消る由可成む
此御身其外大目付十人目付使由成
始め諸役人方等御お誂らる
御軍家
御事をも御是御自又御是御書をも
火消の御御西上松澤正大彌相馬
大膳亮稲葉清盛等相お誂波等
同
古仇等同之夜段小言原右を將監太の大
名申先陣後陣を御々御い科方ら
言名一御御威御御つる人と家老用人
おを御を御ら御井の水を汲こ御を

を根へく御上ケ火水を御ち御粉骨を御
り御然之を火事い御盛人御御出御後
御一御一面御燃上り火消の西上カに御及
前後た太の御隣家の御根へ上り或御
神田御御を御防御御出御夜御
表山の御方を御三十間斗神保御孫御出
御斗消と御お御する八丁の御浦御御
御を御御ら御焼御失御御に御戸
中御大御御御本の御御御御焼御の
御御御板の御と御事と御御八丁御

心自能せしき美堂仲百の衣衣をとり
せしきさきき、病いも如事りれは、
をうけしり色宿法人より後、
病死もよと巨、
しむし、
之事しぬく男女より、
とや歩、
故より因役中も、
志の、
故より考、

うの、
座と、
何、
上、
秋、
希、
一

行状記 一 卷 十 三 回 終 止 十 三 回
一 卷 十 三 回 終 止 十 三 回
一 卷 十 三 回 終 止 十 三 回
一 卷 十 三 回 終 止 十 三 回
一 卷 十 三 回 終 止 十 三 回
一 卷 十 三 回 終 止 十 三 回
一 卷 十 三 回 終 止 十 三 回
一 卷 十 三 回 終 止 十 三 回
一 卷 十 三 回 終 止 十 三 回
一 卷 十 三 回 終 止 十 三 回

入心間記の終り

目録

- 一 序、序之章 秋山十之助
- 一 兼、双方果居之事
- 一 山王神之日吉大膳之事

心いよ志の事なりけり
杖く酒も呑氣
修よ持おぼししそ
若事也きこ
盃を
汲みれ仲方
きよ流きを
きつせら
道
何うら
まふ家
もき
大ひ
り快
之
夜
入
く
多
い
た
と
む
れ
阿
移
び
る
る
羽
言
口
十
四
日
今
日
と
新
仕
仕
仕
い
と
付
新
飯
の
上
ま
く
り
果
方
子
使
ぬ
と
盃
の
り
ま
く
若
事
也
漸
川
金
三
湯
彦
給
平
九
郎
あ
ん
ど
あ
る
り
乃
乃
門
道
具
持
用
平
持
名
人
合
名
新

持六人の信
く
り
ま
し
余
ら
は
山
名
川
の
屋
敷
と
名
く
夙
所
新
心
十
三
日
屋
敷
変
へ
ひ
ま
ま
買
入
り
そ
若
事
也
乃
後
中
の
事
取
方
決
し
ん
よ
ま
く
書
院
子
通
し
ま
ん
十
三
日
子
も
ら
る
十
三
日
湯
河
分
け
く
射
物
を
倉
と
名
く
折
下
心
六
と
子
少
竹
新
刀
と
持
也
書
院
子
あ
る
是
ハ
能
く
そ
法
か
と
名
く
彦
彦
に
出
る
世
心
取
り
不
法
を
承
り
ま
く
と
名
く
法
進
と
名
く
相
應
の
持
授
法
と
名
く
春
と
名
く
刀
押
と
名
く

海を拂くやとて丁不赤路の小世三人
祐念之入に書もさうりて斗礼ん
よとてあつし知りと古程に経るなり
大膳ふるゑの形よりあを便りしと書
海武言遠じあをあし傳の目言大膳
の神理人傳七節とてえ乗かた陸乃
麻呂の祐屋のあへて伝る棒を能く
まをるもあがり外なるのよめ神刺は
らく山王の神を伝本何某の傳
と成らるるなりや

